

## 令和7年夏季の大規模停電について

南本有紀

### Record of large-scale power outages in the summer of 2025

MINAMIMOTO Yuki

---

**要旨** 2025年夏に発生した岐阜県百年公園の大規模停電による岐阜県博物館の臨時休館について概要報告する。7月、百年公園からの電気供給が途絶した岐阜県博物館では、早期復旧を断念し、8月、通常の5割の電力による館機能の維持とテレワーク・仮設事務所・博物館の3形態による執務で2ヶ月間の臨時休館を乗り切り、9月に再開館した。本稿は、臨時休館の状況を記録し、博物館における停電の影響と対応、今後の対策についての参考とする。

---

はじめに

令和7年(2025)夏、岐阜県博物館(関市)は、立地する岐阜県百年公園(以下、「百年公園」と略す)の大規模停電に伴い、2ヶ月間の臨時休館を余儀なくされた。本稿では、この臨時休館前後の時系列の記録(表1)と、博物館における停電の影響及び対応と対策についてまとめ、今後の館運営の一助とするものである。本稿の執筆動機は、停電という博物館の危機的状況とその対応について記憶の薄れに対する執筆者の危機感と、県博物館協会等から共有の要請があったことによる。文化施設の被災記録としては東北大学附属図書館の事例<sup>1</sup>が知られているが、火災で休館を余儀なくされた王塚装飾古墳館(福岡県桂川町)の再開を報じる記事中、「国内で博物館や資料館が火事になったケースはほとんどなく、どのように復旧していけばよいか手探りだった」とあり<sup>2</sup>、負の記憶も記録に残すことで、将来得ることもあると考えた。

折しも、ネットニュースで、当館同様、高圧電線の損傷による停電の事例<sup>3</sup>を知った。1970年代(置県100年のころ)に建設ラッシュだった各地の文化施設は軒並み老朽化しており、今後、こうした事例が続発することも想像に難くない。なお、所属による総括は未然のため、本稿は執筆者個人の覚書であることを付記しておく。

#### 1 経緯と対応

2025年7月13日(日)18時34分、百年公園北口テニスコート付近に埋設された高圧電線が断線し、公園全域が停電した。これに伴い、百年公園より電力を供給されている岐阜県博物館も全館(本館、マイ・ミュージア

ム棟、移築古民家)が停電した。翌14日(月)は通常休館日のため公園・博物館利用者及び職員に特段の影響はなく、博物館職員には、14日中に連絡網で停電の発生と翌15日(火)の臨時休館について伝達があった。このとき、15日は、博物館職員は原則全員週休もしくは年休となり、16日以降は、復旧の目途が立たないため当面の間臨時休館とし、職員は可能な範囲で在宅勤務とするよう指示があった。併せて、中濃総合庁舎(美濃市)(以下、「総庁」)内の空きスペースを借用して仮事務所として運用が始まった。16日には総庁仮事務所において係長以上による臨時運営会議を実施し、以後、毎週この会議で情報伝達・共有が図られ、対策・方針が協議されることとなった。

断絶した高圧ケーブルは特殊な受注生産品であり、即時入手が困難であることから、当初想定では電力の本格復旧までに半年から7ヶ月かかる(本格復旧は年末頃となる)見通しであった。このため、当面の非常電源が必要となったが、費用対効果から非常電源車の導入を見送り、本来必要な電力の5割程度を仮設電源工事により賄うこととなった。これにより、大容量の電力消費を伴う空調(収蔵庫を含む)を断念し、業務の安全と職員の健康を優先して、まずは、トイレを含む水道と部分的な照明、スポットクーラーや機器稼働のための最低限の電力復旧を優先した。空調のない暗闇の展示室に、当然ながら来館者を迎えることは不可能なため、こうして、期間未定の臨時休館が決定した。当面は8月末までの館内催事を一律中止とし、18日以降、順次、参加申込者・関係者へ連絡を開始した。8月を目前にしても情勢に変化な

く、30日には引き続き9月末までの館内催事中止を決定した。夏休み期間の催事中止について、本館機能を喪失した中、告知が行き届かず、申込者をはじめ、講師等関係者、展覧会と関連催事を楽しみにされていた利用者の方々には多大なご迷惑をおかけしてしまった。当館にとっては夏休みが始まるというかきいれどきであったのみならず、特別企画展「鳥の卵のひみつ」は7月12日の開場からわずか2日で休止となり、移動展「ゆかいな冬芽たち」は8月23日の開場前の準備作業が始まるという最悪のタイミングであった。持ち込み企画（館共催の貸館）によるマイミュージアムギャラリー展示は、7月19日に開場が迫っていた第3回展示「鉄道コレクションと旅の思い出今昔展」がほぼ展示作業が完了していたにもかかわらず、完成目前のまま臨時休館に突入した。

仮設電源設置前は、例年のない猛暑の中、職員は、薄暗い仮設照明の下、停電対応電話1回線に電話番番1名（長時間のサービス不能のため午前・午後交代制）を置き、館内業務は最小限として、総庁仮事務所と在宅の3形態で勤務した。業務の性質上、博物館でなくてはできない作業も多い上に、仮事務所には全職員分の席がなく、在宅勤務用PCは数が限られたこともあり、やむなく、炎暑の博物館で執務する職員も少なくなかった。なおいっそう深刻なのは24時間駐在の警備・施設管理担当者（委託<sup>4</sup>）で、就寝場所を比較的室温の低い階へ移動したり、小部屋に集中的にスポットクーラーや冷風機を稼働させたりでなんとかしのぎながらの従事であったと聞いている。

電力喪失により、照明はもちろん、水道（ポンプ汲み上げ）・浄化槽、電波（携帯電話）、ネット環境（業務PC）、停電対応機を除く電話・FAX、コピー機・プリンター等の電気器具、エレベーター（以下、「EV」）が使えなくなり、荷物用EV・電動シャッターが稼働不能のためトラックヤードの公用車が出せず、大きな貨物が搬入できなくなった。これにより、緊急避難させるべき収蔵品を安全に持ち出すことができなかった。館内の展示物と収蔵品は、やむを得ず展示室と収蔵庫に静置したままとし、電池式温湿度計で記録を取りつつ、出入庫・扉の開閉を最小限にしつつこまめにモニタリングすることとした。

ネット環境の有無は大きな問題で、在宅勤務をしようにもクラウドやイントラネットに接続できないため、データ移動ができず、臨時休館中の執務環境はとくに困難が多かった。電力喪失の広範囲にわたる影響を否応なしに認識させられることになった。

プリンターが使用できず、掲示物が作成できないため、

ホームページとSNS（とくにX）を中心に、臨時休館と館内催事中止の告知・連絡を進める一方、すでに配布済みのチラシ・ポスターの撤去の手配と並行しながら、館外催事を予定通り実施した。高圧電線の入手の目途が立たず臨時休館期間の見通しがたたない中、当面、館外事業に注力することとなったためである。直近では、停電前から予定していたサテライト展示（7月16日～）と出張けんぱく教室（同21日）があり、前者は既述の電動シャッターや公用車の使用不能のアクシデントを乗り越えて予定通り実施された。

7月下旬に入り、館内では、高温多湿になりつつある展示室内の展示物への懸念が高まり、特別企画展の借用物や、人文展示室の刀剣等多湿状態に耐性のない資料を中心に撤収作業が行われた。とはいえ、照明がなく、展示室入口シャッターが開閉できないため、資料と職員の安全のため本格的な撤収は諦めざるを得なかった。

このころの復旧想定時期は11～12月と目され、年内の館内活動はほぼ絶望的、臨時休館は年内いっぱい、場合によって年度内続くことが予想されていた。これにより7年度催事中止範囲を協議し、特別企画展「鳥の卵のひみつ」（7～9月）はもちろん、次の特別展「尾張徳川家ゆかりの美濃刀」（10～12月）も見切りをつけることとなった。マイミュージアムギャラリー展示については、第3回（7～8月）、第4回（9～10月）、第5回展示（10～11月）は中止を避け得ない状況であったため、出展者等の関係者に状況説明と中止見込みを伝え、12月以降の催事については、希望をもって開催するつもりで準備するよう指示があった。

7月29日、百年公園が翌30日の再開を報道発表した。公園の場合、施設（テニスコート、トイレ、事務所等）に大容量電力を必要とせず、施設ごとに小規模な仮設電源を設置して早期の再開にこぎつけたのである（大電力を要する大規模トイレ棟は閉鎖のままであった）。

8月5日夜間、仮設電源を設置し、館内の照明・コンセント・ネット環境が復活し、空調は稼働しないものの、短時間の館内執務が容易になった。

8月12日、仮事務所を博物館に近い県産業技術総合センター（関市）へ移し、全職員一堂の従業が可能となった。同時に、24時間空調と施錠が可能な専用スペースを確保し、万一の収蔵品移動に備えた。間借りではない、空調とネット環境が完備された職場環境は実に1ヶ月ぶりであった。同じころ、高圧電線の入手が当初予定より大幅に前倒しされ、早ければ8月末、遅くとも9月末までに百年公園の電力が復旧する見込みであることがわかった。

8月26日に百年公園の仮設電源から本電源への切替工事と通電があり、園内の高圧受電設備の不具合（要部品交換）で少々の遅れが出たものの、27日には博物館も本電源切替・通電が完了、電力が復旧した。園内の通電範囲が順次拡大され、博物館に少し遅れて移築古民家（旧宮川家住宅主屋）へ通電が完了し、全館の電力が復旧した。但し、通電直後の空調はすぐには稼働できず、準備段階を経て、徐々に空調稼働範囲を拡大し、併せて、開館に向けて本格的な再開準備に入った。

各種設備の点検とならし運転を経て、段階的に通常業務を復活させるべく、9月13日の再開館を目指して、8月下旬～9月前半は館内の点検と来館者の受入準備に当たった。普段来館者に対応している解説員を中心に、各職員が来館者の動線に沿って、臨時休館の影響がないかを検証し、確認された展示室内の標本の被害（カビ等）に対応（エタノール拭き取り）した。この段階で館内にはカビ臭や薬品臭（後述するナフタレン昇華による）があり、検知管による空気環境測定を実施の上、化学物質の濃度が人体に影響ないレベルであることを確認した。以上の点検の一方、特別企画展・常設展示は一部撤去していた資料を戻したり、展示物を入れ替えたりした。最終的に、臨時休館の影響による展覧会の変更は、特別企画展は会期を延長、特別展は中止（8年度に延期）、マイミュージアムギャラリー展示は第3回と第4回展示を8年度へ延期して、第5回以降を予定通り実施となった。2026年1月現在、9月13日再開以降の館内・園内催事はこの変更通り遂行されている。

以上、停電の発生から復旧まで、時系列にまとめた。文末にこの一覧を付しているのので、併せて参照されたい。

## 2 特記事項

2025年の夏は、8月5日に群馬県伊勢崎市で国内最高気温41.8度を記録<sup>5</sup>したように、例年以上の酷暑であった。こうした事態は事前に予想不可能ではあったが、空調なしの館内業務はそれなりに危険を伴ったように思う。想像以上ながら暑さは覚悟していたものの、以下に列記する想定外の事態が発生した。

冷凍庫に保管していた動物遺体（標本作成用）は、7月15日までに廃棄または譲渡したが、暗闇の中の作業であったため一部見落としがあり、館内が高温多湿状態になるに従って異臭が発生し、脱臭機や空気清浄機で対応した。同時に、植物標本庫のナフタレン（防虫剤）の昇華が進み、庫内に立ち入れないほどの臭気が立ち込めた。活性炭等で対応したが、この臭気はしばらく続き、

移動展の展示物が取り出せないため、至急、新たに標本を作製したり、県森林文化アカデミー（美濃市）から標本を借用したりして代替した。平時にあっても当館のような古い建物内で時折問題になる臭気は、配管システムにより建物各所に思わぬ影響を及ぼし、後々再開に向けて脱臭には苦勞させられた。

電動シャッターは、新しい型式の場合、停電時の手動機構が用意されていると思われるが、50年前の建築時に設置された古いシャッターは、無理に手動で開けると閉められなくなる可能性が大であった。大型バンが出庫できず、サテライト展示の搬出入に多大な影響を被った。館内催事を断念して館外催事にシフトする中、たいへん困ったが、幸い、県関ヶ原古戦場記念館（関ヶ原町）から同型の大型バンを借用できて事なきを得た。

電動機構については、当館には配備されていないが、電動開閉式の展示ケースについても、停電時の開閉方法を事前に確認しておくべきだろう。県有の別施設にエアタイトケースを整備した際、標準仕様では前面ガラスの電動開閉装置のみで不安に思ったことがある。

資料に有害な外光を避けるため開口部の少ない博物館の建物は、照明がないと暗闇であり、行動不能に陥ってしまった。逆に、少しでも明かりがあるとなんとか動くことができた。

パネルやキャプション作成は、電力がなくてもできそうなものだが、実際には真つ暗な室内でのキャプション切りは不可能であった。そもそも大型プリンターが稼働しなかった。これらの展示準備作業のために館外に作業場所を探さざるを得なくなり、移動展の会場である県図書館（岐阜市）と隣接する県美術館（同）に場所を提供いただいた。

ネット環境がないと全く仕事にならないことは想像以上であった。逆に、ネット環境さえあれば場所を選ばずにある程度の業務はこなせる。開場2日で休止となった特別企画展について、せめて非来館でもサービス提供を、とホームページに開設した目録のダウンロードと図録通販フォームは好評で、図録は関東から沖縄まで、普段来館されない地域から注文が入り、新たな利用層を開拓した感があったのは不幸中の幸いであった。

31人の全職員が揃って勤務できる環境が必要であったが、仮事務所では難しかった。コロナ禍以降、リモートワークが浸透したとはいえ、情報把握と共有には工夫が必要であった。週1回の定例会議を設けるとともに、LINEグループを作り、こまめな連絡・情報共有を図った。それでも、顔を突き合わせての話し合いが必要な場

面はどうしてもあった。

臨時休館中の催事のうち、講演会は5本中、中止3本（うち1本は8年度に延期）、延期2本であった。7月から9月にリスケジュールしたものの大半がキャンセルされたり（結局、休館期間が長引いて最終的に中止になった）、8月から11月の変更回への参加申込みは元の85%にとどまったり、夏休みというアドバンテージを逃したのは集客的に大きな痛手であった<sup>6</sup>。

後々の影響が大きかったといえば、「教員のための博物館の日」（7月23日～25日）は合同の団体利用説明会を兼ねており、これが中止になったために、7年度中の団体利用は事前説明・打合せが個別対応<sup>7</sup>になって業務を圧迫し、かつ、再開後の団体利用が停電前の申込数に復することはなかった。学校行事は前年踏襲されることが多く、影響は次年度にも及ぶことが懸念される。

館内行事が軒並み中止される中、博物館実習（8月24日～28日）は、中止による学生の単位（資格）取得への影響が大きいことから、総庁会議室・産業技術総合センター・博物館の3か所に分散して実施された。無空調の暗い博物館で、実習に励んだ実習生は大変だったろうと思う。

### 3 協力と支援

前項に書いた県森林文化アカデミー、県図書館、県美術館、関ヶ原古戦場記念館以外に、館外事業への企画・会場提供で、岐阜現代美術館（9月15日「生き物の頭骨のお話とオリジナル頭骨をつくろう！」）と岐阜女子大学（9月20日「接触モデル作成のための3Dスキャン講座」）に協力いただいた（いずれも県博物館協会で濃ブロック部会の事業として実施）。前者は県博物館協会の加盟館どうしの関係から実現したもので、協会からは絶えず心配や励ましの声をいただいた。

県美術館ミュージアムショップは、当館ミュージアムショップの特設コーナーを設けて、委託販売して下さった。第37回全国健康福祉祭（ねんりんピック岐阜2025）・ぎふモーニングプロジェクト等のイベントや、夏休み期間のファミリー層の来館を見越し、当館の、とくに子ども向け商品について取扱希望をいただき、再開後の11月3日（岐阜ふるさとを学ぶ日）まで期間を延長して取り扱っていただいた。当館とは異なる客層に、いつもと違う売れ行き（和綴じキット等がよく売れた）であったのも新たな発見であった。

そのほかに、連携事業で日頃お世話になっている三重県総合博物館やモレラ岐阜（本巣市）から支援の申し出をいただいた。後者は社内会議で当館の停電を取り上げ

てくださったとのことであった。アクティブG（岐阜市）からもできることがあればお声がけいただいた。結果的に形にならなかったが、こうした声は極暑と心労でふらふらだった我々職員を励ました。非常時の支援は平時のお付き合いを反映することを実感した。

### 4 停電という災害

岐阜県博物館協会もの部会<sup>8</sup>からは、7月20日に照会があり、29日に急遽オンラインで部会が持たれた。その際、電力喪失の過酷な状況について「災害級」との感想が出た。これまで、もの部会で取り組んできた文化財レスキューでは、水害・地震が主な対策を講ずべき災害と認識されてきた。総じて、現代の博物館は、24時間空調をはじめとする電気前提の施設であるため、長期にわたる停電は文字通り災害並みの被害を及ぼす。当館でも火災等の一時的な電力喪失を想定した非常電源は備えていたが、高圧電線損傷による長期の停電は想定外であり、対応不能であった。実際問題として、空調による温湿度管理以外にも、館通常業務の大きな部分を大型荷物EVや電動シャッター等、電気なしでは動かない設備に頼っており、収蔵品の非常持ち出しリストはあっても、実際に安全な搬出は物理的に不可能であった。

仮設電源の常備は費用・管理面で現実的ではないが、非常時に借用・手配できる機関（当館の場合、県庁本課・県事務所・土木事務所等）を把握しておくことや、県博物館協会等、平時のお付き合いが備えになると実感した。

### 5 振り返りと対策

結果的に想定より大幅前倒しの復旧がかなったとはいえ、後から振り返ると反省点がいくつか挙げられる。停電の当事者（公園所管者）でなかったため、主体・積極的な対応ができなかったのはやむなしとせざるを得ないが、早い段階でスモールスタートに舵を切れれば、早期に諸準備にかかれたと思われる。まずは資料の安全第一で収蔵庫の24時間空調等、完全復旧に執着し、8割・5割の電力復帰に目標設定を下げることに躊躇があった。電力喪失は多くの機能停止を発生させることから、早い段階で現実的な対応策を実施していくことが重要である。

令和元年度博物館総合調査<sup>9</sup>によれば、建物80.8%、空調・給排水・電気設備84.3%について「早急に、あるいは中期的に老朽化箇所の対応が必要」であるのに対し、「総合防災計画」「危機管理マニュアル」策定済みの館は半数以下（48.3%）に留まる。比較的対応の進んでいる公立館についても想定する大規模災害は地震であり、電

力喪失への対応は難しいと想像される。

ともあれ、停電の原因であった高圧電線（旧規格）を交換して根本原因が解消されたため、以後、新規格の高圧電線では同様の不具合は発生しないはずである。

停電対策として、下記を整備したので、参考まで列挙する。なお、既述の事情により収蔵庫内の環境整備は調湿材・除湿剤の設置等の対応にとどまり、以下の対応は執務環境に関わるものが主である。昨今ブームのアウトドア用品には停電対策に役立つものが多い。ネット環境配備までのつなぎとして個人所有のポケットWi-Fiが活躍したが、県会計規則上、これらの整備は難しく、断念した。インクジェットプリンターは高温多湿な環境で液漏れを起こして印刷エラーが多発し、復旧後も不調が継続している（2026年1月現在）。空調服や冷感タオル等、昨今の熱中症対策グッズが役立った。空調服は臭い（体臭）の問題があり、共有ではなく、できれば個人配備が望ましい。40度超の室内では扇風機は熱風となるため、スポットクーラーや冷風機が望ましい。

以下の列挙物品の他に、仮事務所経費として、施設の借り上げ（県施設のため無料であったが、折衝やアンテナ接続、各種手続きを要した）のほか、駐車場や携帯電話のレンタル契約が必要であった。

最後に、今回の停電は夏季に発生したが、発災時期によっては寒さ対策が必要だろう。体調管理の面では、むしろ寒冷対策のほうが重大である。暑さ寒さは生命にかかわることがあり、資料第一であるべき博物館にあっては資料の保全同様に要対策である。

### 【停電対策品】

ポータブル電源、送風機（収蔵庫換気用）、冷風機、消臭剤・脱臭炭・脱臭機（臭気対策）、エタノール（補充用）、高性能マスク（N95）・高性能マスク（活性炭フィルター）（カビ孢子・臭気・化学物質対策）、温湿度計（アナログ・非デジタル表示）、非常用バッテリー、ガスボンベ・ガソリン携行缶（発電機用）、空調服、圧縮袋（湿気対策）、発電式ランタン、ヘッドライト、網戸、延長コード、除湿器・除湿剤、自家発電装置、空気環境調査キット

おわりに：暑さのニューノーマルに向けて

移築古民家を見学して、簡素な造りに驚かされたことはないだろうか。冬の飛騨では起床時に枕元にうっすら雪が積もっていたという昔話を聞いたことがある。このように昔の建物はすき間だらけだった。高気密・高断熱の快適な現代住宅は、日進月歩の建築技術の賜物であり、

断熱に加えて、防湿・透湿機能と現代の高気密施工があったこそ、「空調いらず」の快適なエコ建築が実現<sup>10</sup>する。

一方、徳山ダム（2008年竣工）に水没した旧徳山村（1987年廃村、現岐阜県揖斐川町）から百年公園に移築（1987年）・岐阜県博物館が管理している古民家（旧宮川家住宅主屋）内（土間等）に収蔵展示されていた民具資料は、執筆者が赴任した2010年代には風化が進み、一部の崩壊した民具は資料登録を解除せざるを得なかった。囲炉裏の日常的な使用こそなかったが、雨天を除き開園・開館日には戸の開閉を欠かさず管理されていた民家内であっても資料の保管は至難の業である。それに対して、空調管理された収蔵庫内の民具は同じ歳月を永らえている。異常気象が常態化する現在、温湿度、とくに湿度管理されない資料管理は現実的ではない。

2025年12月、新語・流行語大賞を受賞<sup>11</sup>した「二季」の通り、日本列島の高温多湿期間はますます長く<sup>12</sup>、過酷になっている。2025年夏の日本の平均気温は平年を2.36℃上回り、東京の猛暑日は観測史上最多の29日だった<sup>13</sup>。「暑さのニューノーマル」<sup>14</sup>は想像を超えた速さと規模で更新されており、多くの博物館が建設された30年前<sup>15</sup>の想定仕様では安全に収蔵品を管理することは困難になりつつある。博物館の常識をアップデートしていく必要があるのはもはや自明である。

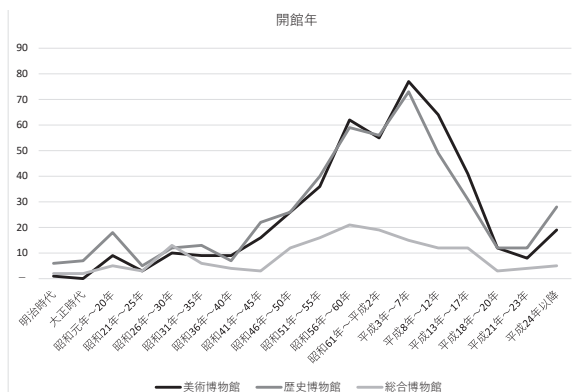
高温の夏と大雪の冬という異常気象が「普通」になる中、無空調で数十年から数百年を経て継承されてきた文化財についても、今後は安泰とはいいがたい。寺社の宝物庫は空調がなく、湿気（カビ）対策として換気扇のみという仕様<sup>16</sup>が多く、無空調では、ますます過酷になる夏冬の厳しい環境をしのげなくなってきたと想像される。翻って、24時間空調前提の博物館設備も、持続可能性を鑑みれば心許ない。異常気象により降雨の状況も一変しており、建築当時の想定以上の一時的な大量降水が常態化している。排水処理が追い付かないだろう。水害・地震等、災害の発生が「普通」になる中、災害を前提とした備えとレジリエンスが博物館にも求められている。

電力に依存した博物館運営には再考と、全ての館に停電対策・想定が必要だと主張したい。折しも、サステイナブルな展覧会のあり方は全世界的な関心事項になっている<sup>17</sup>。環境負荷を意に介さない博物館・美術展運営は岐路に差し掛かっているといえないか。

今季最強の寒波が襲来する中、本稿を執筆していると、昨夏の停電は遠い異世界の話のようで、喉元過ぎれば執筆時にはすっかり忘れてしまっていたことも多かった。支援いただいた各機関・関係者には改めてお礼を、ご迷

惑をおかけした関係各位にはお詫びを伝えたい。願わくは、他山の石とされたく、禿筆を呵す次第である。

- 1 [東北大学附属図書館 2022]
- 2 [読売新聞オンライン 2025]
- 3 [停電で休館していた護佐丸図書館、時間を短縮して再開 歴史資料・企画展示室は利用できず 沖縄・中城村 2026]
- 4 当館の場合、警備・施設管理のほか、清掃・受付業務を委託しており、清掃は照明と水道の復旧後、回数を減らして実施し、受付については、臨時休館中は休止せざるを得なかった。受託業者は従業員の体調管理と雇用確保に苦慮されたと想像される。
- 5 [歴代全国ランキング, 2026]
- 6 とくにミュージアムショップの減収(8月は売上なし)が大きかった。
- 7 持ち物等の詳細(例えば、化石レプリカづくりの新聞紙は束ではなく一枚を持ってくる等)についての伝達は個別対応より全体説明会のほうが確実に伝わる傾向が見受けられた。
- 8 資料保存関係の部会[協会について, 2026年1月10日閲覧]
- 9 [令和元年度 日本の博物館総合調査報告書 2020]
- 10 高気密の建材だけではかえってカビだらけになってしまう恐れがあるとのこと。
- 11 [第42回 2025年 授賞語, 2025]
- 12 1982年から2023年の42年間で日本の夏は約3週間長くなり、春と秋は短くなっている。[立花義裕, 2025]
- 13 [[《2026年の気象を予測》2025年以上に暑くなる可能性、夏は“1年の3分の1以上”に…強い夏と冬に押されて春秋が短くなり、季節の“二季化”が進む, 2026]
- 14 [平野有海, 2025] [立花義裕, 2025]
- 15 令和3年度社会教育調査によると、調査対象のうち総合博物館(157館)と歴史博物館(476館)のいずれも平成3~7年(1991-95)に開館した施設が約半数を占める。以下のグラフは【社会教育調査 / 令和3年度 統計表 博物館調査(博物館), 2021】より作成。



- 16 自然換気方式の従来型から、高気密高断熱・機械空調補助式へ設計指針も変更されている。[文化財(美術工芸品)保存施設、保存活用施設 設置・管理ハンドブック, 2015]
- 徳山民俗資料収蔵庫(岐阜県揖斐川町 2003年開館)は空調を用いず、二重壁内の空気循環で湿度を制御。
- 17 [難波祐子, 2023] [CIMAM 会長・片岡真実が説く、美術館におけるサステナビリティへの取り組みの重要性, 2021] [美術館を展示する：和歌山県立近代美術館のサステナビリティ, 2021]

参考文献

《2026年の気象を予測》2025年以上に暑くなる可能性、夏は“1年の3分の1以上”に…強い夏と冬に押されて春秋が短くなり、季節の二季化が進む. 2026年1月3日.  
[https://www.news-postseven.com/archives/20260103\\_2083370.html?DETAIL](https://www.news-postseven.com/archives/20260103_2083370.html?DETAIL).

CIMAM 会長・片岡真実が説く、美術館におけるサステナビリティへの取り組みの重要性. 2021年9月5日.  
<https://bijutsutecho.com/magazine/insight/24535>.

協会について. 2026年1月8日閲覧.  
<https://www.gifu-museum.jp/about>.

“社会教育調査/令和3年度統計表 博物館調査.”  
 e-Stat 政府統計ポータルサイト. 2021年10月1日.  
[https://www.e-stat.go.jp/stat-search/files?page=1&layout=datalist&toukei=00400004&tstat=000001017254&cycle=0&tclass1=000001203281&tclass2=000001203283&tclass3=000001203289&tstat\\_infid=000040038504&tclass4val=0](https://www.e-stat.go.jp/stat-search/files?page=1&layout=datalist&toukei=00400004&tstat=000001017254&cycle=0&tclass1=000001203281&tclass2=000001203283&tclass3=000001203289&tstat_infid=000040038504&tclass4val=0).

水谷悦子・伊庭千恵美・田中琴巳・由井和子・秋山純子.  
 “博物館・美術館の夏季の空調消費エネルギーと空調設定温度が冬季の収蔵庫内環境に及ぼす影響.” 保存科学 63, 2024.

青木豊.人文系博物館資料保存論【新装版】.雄山閣, 2025.  
 第42回 2025年 授賞語. 2025年12月.  
<https://www.jiyu.co.jp/singo/>.

停電で休館していた護佐丸図書館、時間を短縮して再開 歴史資料・企画展示室は利用できず沖縄・中城村. 2026年1月16日.  
<https://news.yahoo.co.jp/articles/a2bfee1eba355341faeb9271229852a157f2589f>.

東北大学附属図書館. 東北大学附属図書館における福島県沖地震(2022年)対応記録. 2022年3月27日.  
[https://www.library.tohoku.ac.jp/news/2021/TUL\\_EQ20220316report1.html](https://www.library.tohoku.ac.jp/news/2021/TUL_EQ20220316report1.html).

読売新聞オンライン. 火災で臨時休館中の王塚装飾古墳館、来年度中の再開目指す…かけらから復元した高さ1mの円筒埴輪を公開へ. 2025年10月18日.  
<https://www.yomiuri.co.jp/local/kyushu/news/20251018-OYTNT50093/>.

難波祐子. 現代美術キュレーター10のギモン. 青弓社, 2023.

日本学術会議. 提言 壊滅的災害を乗り越えるためのレジリエンス確保のあり方. 2023年8月29日.  
<https://www.scj.go.jp/ja/info/kohyo/pdf/kohyo-25-t351-3.pdf>.

美術館を展示する：和歌山県立近代美術館のサステナビリティ. 2021年9月19日.  
<https://www.momaw.jp/2020/momaw50/momaw50.pdf>.

文化財(美術工芸品)保存施設、保存活用施設 設置・管理ハンドブック. 文化庁文化財部美術学芸課, 2015.

平野有海. “4.1. 8度の衝撃.” 社会教育, 2025.

立花義裕. 異常気象の未来予測. ポプラ社, 2025.

令和元年度日本の博物館総合調査報告書. 日本博物館協会, 2020.

歴代全国ランキング. 2026年1月.  
<https://www.data.jma.go.jp/stats/etrn/view/rankall.php>.

高妻洋成、小谷竜介、建石徹. 入門 大災害時代の文化財防災. 同成社, 2023.

